



ツノツノ、イツポン。



bloodmaria

ツノツノ、イッポン。

---

派出所へ不審な男が現れたのは件の事故発生から約一時間半が経過した頃。

泥酔はしていたものの薬物中毒の症状は見え、所持品は小銭と切符が入った財布、免許証、ハーモニカだけで犯罪に関わるような物は見つからなかった。

駐在していた警官は適当に男を宥めて、しばらくした後、タクシーを呼んで自宅へ帰した。

調書に用いようとしていたレコーダーに男の供述が録音されている。泥酔時に見ていただろう意味不明の話がほとんどで、件の事故との関連は一切見当たらない。

内容を以下に記す。

「オレじゃない。なあ、故意とかじゃないのはわかるだろ？ 例えば調子の悪い誰かをドライブに誘って……そいつが調子悪いなんて知らなくて、そいつの車が事故ったとするじゃないか。誘ったことは罪にならないだろう？ あいつとは今日の夜中に出会ったばかりで、どういうやつなのかも知らなかった。そんなの知る術なんかないだろうし……。

落ち着いてるさ！ 順を追って話すよ……頼むから、最後まで聞いてくれよ。きっとアンタは途中で呆れるだろう。でも、お願いだから常識とかスッカラカンにして聞いて欲しい。おとぎ話を聞く気分で構わないから。

オレは……子どものときからなんだ。病気とか、怪我とかで調子が悪くなると……敏感になる。その、"外に影響が出る幻"を見ちまうんだ。そう、あれは幻なんだ。実在してるなんて云わないよ。馬鹿げたことは云わないさ。ただ……ただ、何ていうか、あれが泳ぐと他の人にも小波が見えるし、ドデカイのが飛び去ったら、とんでもない風や竜巻が起きちまう。炎みたいな人影が空中から見下ろしていたら要注意だ。蛇みたいなやつが地面からせり上がってたら、できる限り遠くに逃げた方がいい。……頼むから、ちゃんと聞いてくれ。冗談だと思ってくれていいから最後まで話させてくれ。

昨日は、ここから少し行ったところの湖にいた。色々、考えたいことがあって……どうでもいい気分になって、気づいたらしこたま酒をあおってた。酔っちまったら見え出すのに。ハーモニカ……こいつを吹いていい気分になってた。湖から大物が出て来るまではね。身体はトカゲにそっくりなんだが、頭が人間だった。その"女"は体長がゆうに十メートル以上あるヤツで、運悪く目が合っちゃった。オレが見えてるときは、あっちも見えてるらしいんだ。コミュニケーションなんか期待できない。友好的"そう"なヤツはいるけど、大抵はヤバイ。虫を見つけた好奇心旺盛な猫みたいに向かってくる。悪意なくじゃれられるだけでも危ないのに、敵意を持ってるヤツは洒落にならない。

目を合わせたり、話しかけたり、アピールしなけりゃ相手にしないで消えてくれる場合もある。でも、あの女はダメだった。どうでもいいと思ってたのに。どうにでもなれって思ってたのに……オレは必死で逃げ廻ってたよ。ホラーゲーム並にね。クソ忌々しい！ ……急性アルコール中毒でぶっ倒れるかと覚悟するくらい走らされた。山の中腹くらいまで登らされて、ようや

く諦めてくれたんだ。ああ、マズイ事になった。よりによって山の中に逃げるなんて。あいつ等の巢窟なんだ。

オレにとっては超危険特区だよ。天狗は知ってるよな？ あれなのかどうなのかわからないが、カラス人間みたいなヤツに絡まれると厄介だ。群れてて、よくわからない言葉で会話してる。人間の言葉を真似て、木の上からずっと追いかけても来るんだ。子どもの頃……あのとき、絶対にあれは喰おうとしてたはずだ……とにかく喚いてうるさいし、枝を落としてきたりして危ない。ああ、そうさ、アンタが昔話で聞いたことのあるヤツは大方見たことがある。いまのオレみたいにおかしな連中だよ。

どうにか人里に降りようとしていたんだ。夜も更けて、どっぴりと月も出ていた。懐中電灯を持っていたのがせめてもの救いだった。それでもギリギリ近づかなきゃ、どこに崖があるかもわからないくらい真っ暗闇で、オレは途方にくれてビクついてたよ。混乱してた。怖くて、寒くて、惨めで、腹が立って、またどうでもよくなってきて……ハーモニカ、ハーモニカを思い出した。月明かりが照らす原っぱのど真ん中で、オレはハーモニカを吹き始めたんだ。

そいつが木陰から顔を見せて、二階建ての家ぐらいある身体を原っぱへ突き出したとき、死ぬんだなと思った。

仄かな光の中だったけど、全身が真っ赤なのはわかった。大きなツノが一本、頭から伸びていた。いつものオレなら、いやアンタでも、腹の底から叫びたくなる形相でこちらへ歩いて来たんだ。一歩進んで来るたびに、石へ座っているオレのケツが振動した。

鬼だ。

金棒はなかったけど、紛れもなく、誰が見ても鬼だった。ツノが一本生えた赤鬼だった。瞳のない白い眼球を輝かせて、頬骨辺りまで切り開かれた口は隠しきれない牙を剥き出していた。

ゆっくりと赤鬼が巨躯を揺らしてハーモニカを吹いているオレへ近づいてくる。……オレは逃げなかったし、息が震えたけどハーモニカもやめなかった。こんな目に合ってる腹立たしさが肝をすわらせてた。とり憑かれても殺されても、今度こそどうにでもなれとっていて……自分自身にヘンテコな誇らしさを感じてさえいた。

とうとう、赤鬼はオレの前に立った。立ったというよりそびえたと云った方が適当だ。オレは赤鬼の白炎のような視線を受け止めて、なおもハーモニカを止めなかった。

……一向に赤鬼は飛びかかって来ない。恐怖は最高潮に達していた。すると変なもんで、自分から分離した冷静さみたいなものが自動で赤鬼の全体像を観察しだしたんだ。あることにオレは気づかされた。赤鬼の怒り肩を見て、最初はまさかと……でも、確かに……あいつはそうしてた。

リズムをとって肩を揺らしている。ハーモニカの音色に合わせて、赤鬼は踊りだそうとしていた。

オレは未だ怯えながらも感動していた。こんなことはFPSホラーゲーム人生の中でも経験したことがない。オレも次第に楽しくなってきた。開放感でいっぱいだった。闇夜に目が慣れたせいか星がやけにキラキラしていて、丸い月はとっくりとオレたちを見渡している。最高のステージに思えた。

石から立ち上がった。あの曲だ。あれしかないと思ったね。聞いたことあるだろ？ テレビのやつだ。オレは曲を一変させて踊りだした。タンゴってどう踊るのか知らなかったけど、簡単なステップを踏んで赤鬼が真似しやすいように工夫したんだ。

赤鬼は……踊りだした！ オレを真似しだしてステップを踏むようになった。 凄い！ いまオレは凄いことをしてる！

青鬼役になったオレと月光の下で踊る赤鬼。あの類と初めて心が通い合った瞬間だった。リズムで身体が廻り、興奮でステップに熱が入る。オレの感情が伝わっているみたいに赤鬼の踊りも一心不乱になっていく……ああ！ 夢心地！

赤鬼が、何メートルも飛び跳ねて、力強く着地したとき……大きく地面が揺れて……沈んだ。

原っぱだと勘違いしてて……オレたちは、あのトンネルの真上で踊ってた……。

赤鬼は消えていた。オレは瓦礫の上にいる……どれだけ経ったのか、ヘリコプターや消防車がやって来て……。

オレじゃない。オレじゃないだろ？ オレは関係ないんだ。幻がやったことだ。それとも幻を見るのは犯罪かい？ オレは何も悪くない。あいつがやったことだ。オレは関係ない。オレは殺してないだろ？ オレはハーモニカを吹いて踊ってただけだ。オレじゃない。彼らは運が悪かったただけだ。オレは知らない。あいつの仕業だって教えたかっただけさ。オレの妄想だ。妄想で人は殺せないだろ？ それなのに、あの天狗どもは『お前が馳走を用意した』って騒ぐんだ。嬉しそうに鳴き喚いてた。オレの所為じゃないのに。人間じゃないくせにペラペラペラペラ喋り続けさ！ なあ、聞いてくれよ！ ちゃんと聞いてくれ！ また最初から話すよ！ オレじゃないんだ！！」